

ガボール・ザボ 『ハンガリアン・ラブソディー』

ハンガリー出身のガボール・ザボは、ジャンゴ・ラインハルトに通じるジプシー的感覚を持つジャズ・ギタリストだ。アメリカに渡ってチコ・ハミルトンのバンドで活動し、その後はインド音楽に影響を受けてシタールを取り入れた作品も残している。CTIからは2枚のアルバムを発表し、傘下のサルヴェイションから1975年に発表したのが『ハンガリアン・ラブソディー』。ボブ・ジェームスが初めてプロデュースを任された作品で、ザボのエキゾチックで幻想的な風味に富むギターと、ボブ・ジェームスならではの都会的なジャズ・ファンク・サウンドが見事に結びついた1枚となっている。

CTIのいろいろなギタリストの中、ガボール・ザボはもっともユニークだ。ハンガリー出身なので、アメリカ人とは異なるバックグラウンドを持つ。ザボと同じブタペスト生まれの先人ギタリストにエルク・バクシクがいるが、むしろそのいとこのジャンゴ・ラインハルトに通じる、ジプシー音楽の影響を感じさせるギタリストだ。独学でギターをマスターし、歌手の伴奏や映画の仕事をしていたが、1956年のハンガリー動乱を機に渡米し、パークリー音楽院でジャズを学ぶ。ビリー・バウアー、ジミー・レイニー、タル・ファーローなどに影響を受け、豊かな技法や歌心あふれるプレイを磨いていった。ニューポート・ジャズ祭出演をきっかけにチコ・ハミルトンに認められ、バンドに参加したのが1961年末。ハミルトンのバンドはジム・ホール、ラリー・コリエル、故郷の先輩格にあたるアッティラ・ゾラーなど、優れたギタリストがプレイしたことで知られるが、ガボもここで大きく飛躍し、1965年にインパルスでソロ作『ジプシー '66』を録音。表題どおりルーツのジプシー音楽をモチーフに使った。

1966年は代表作の『スペルバインダー』と『ジャズ・ラーガ』、ゲイリー・マクファーランドとの共作『シンパティコ』と多くの録音を残すが、『ジャズ・ラーガ』ではインド音楽に傾倒し、シタール演奏も行った。1960年代後半はインド音楽ほか、サイケ・ロックやポップスにも接近するなど幅広いところを見せ、ゲイリー・マクファーランドやカル・ジェイダーと新レーベルのスカイも創設。マクファーランドの死によるレーベル休止後はブルー・サムへ移籍し、1971年に『ハイ・コントラスト』を発表。トミー・リピューマのプロデュースで、ボビー・ウーマックと共演した収録曲「ブリージン」は、後にジョージ・ベンソンがヒットさせた。このように豊富なキャリア、多彩な音楽遍歴を誇るザボだが、CTIでは1973年に『ミズラブ』と『放浪者』を録音し、ポール・デズモンドの『スカイラーク』にもゲスト参加した。そして傘下のサルヴェイションから、1975年に本作『ハンガリアン・ラブソディー』を発表する。

当時、アレンジャーとして頭角を表していたボブ・ジェームスは、以前のガボの作品にもキーボードで参加していたが、本作では自身初となるプロデュースを行っている。ミュージシャンも彼の周辺で固め、サウンド自体はいかにもボブ・ジェームスらしい都会的なジャズ・ファンクが中心。ザボとジェームスの作曲したナンバーほか、リストの表題曲をディスコ調にアレンジし、フィービ・スノウの「ポエトリー・マン」も取り上げている。聴きどころはガボのギターが全体のサウンドにどう調和するかで、幻想的な「タイム」では両者の特徴がうまく結びつき、「マッちょ」でのエキゾチックな旋律と疾走感のあるサウンドの融合も素晴らしい。そして、「トランシルヴァニア・ブギー」や「ジギディー・ザグ」のような、ファンキーでグルーヴィーな曲にもザボのギターは見事にマッチする。